いなべ市 郷土資料館より　No.11　令和6年９月11日

体験教室「染物体験 手ぬぐいづくり」大成功でした！

令和６年９月８日(日)

昔の人々の生活を深く知るために染物の体験学習を行いました。参加されたみなさんは、染物に関心が深く、作品作りもとても丁寧でありながら挑戦的というかクリエイティブな感じで、今までに見たこともない作品が次々に出来上がりました。駐車場には、この世に二つとない作品がならび、お互いを讃え合いながら、笑顔でいっぱいでした。

「藍染（あいぞめ）」と「絞染（しぼりぞめ）」

郷土資料館が染物を大事にしているのは、収蔵資料に、藍甕（あいがめ）、藍玉（あいだま）、伸子（しんし）、などの染物屋さんの染具があり、昔の人々のくらしに重要なものであったということです。

江戸時代～昭和の初めのころの様子として、「村に一つは紺屋（染物屋）があり、村の人々はお家で紡いだ糸や農作業の合間に織った布を染めてもらうために利用した」というような記述がみられます。当館の染物関係の資料は市内のあちらこちらで使われていたものであり、染物屋（紺屋）さんが広く普及していたことがわかります。

「Japan ブルー」でおなじみの紺色、その染料である藍は日本で古くから使われてきました。特に木綿栽培が一般に広まる中世には、戦国武将が鎧の下に着たり、農作業の野良着、職人の法被や作務衣などいろんな場面で使われ始めました。色だけではなく、藍の効能にも利点があり、ケガをした時にも化膿止めになるとか、虫よけになるとか、藍葉を煎じて飲んだりおひたしのように食べたりすると体にいいなどということです。とても重宝でありながら栽培するのは難しくなかったようです。「蓼食う虫も好き好き」のタデ科の植物です。

濃紺の布地に白い模様を染め抜く技法に絞り染めがあります。奥の深い日本の伝統工芸ですが、割り箸と輪ゴム、ビー玉で再現したのが写真にある作品です。自分だけの手ぬぐい、ハンカチ、ストール、暖簾・・・作ってみると愛着と共に毎日が楽しくなりますよ。

夏の企画展「員弁の近代化を進めてくれた企業さん」令和６年９月22日（日）まで

ご好評いただいています特別展ですが、今月末までとなります。ぜひご覧になってください。

いなべ市 郷土資料館
いなべ市藤原町上相場838番地
電話 0594 46 2526
E-mail i-kyoudo@m7.cty-net.ne.jp